

## 全国水土里の語り部交流会（H19. 3. 3） 意見交換会の発言要旨

### 安実隆直氏（水土里ネット七ヶ用水 総務課長）

- ・用水を管理している水土里ネットがその用水の歴史を勉強し、学校では教えないことを語り部として年間2,000人に話しをしている。これらの活動を通じ人々に語り継ぎ、用水を守っていききたい。
- ・都市化・混住化のなか用水の役割は多様化してきている。従来、水土里ネットは用水の維持管理を行ってきたが、水土里ネットの役割として、地域住民の生活に何らかの形で関わっているということを再認識してもらっている。
- ・これから共同活動に地域全体を巻き込んでいきたいという思いで取り組んでいる。

### 佐藤水土里ネット専務理事

- ・全国の水土里ネットにおいて、地域に合った21世紀創造運動の取り組みを展開している（自然や景観を守ったりする取り組みも行っている）。国民にも活動が見えてきたのではないか。
- ・水土里ネットの主な活動は農業用水路の管理などだが、今後とも水土里を守っていく活動を展開していきたい。

### 宮田正治氏（見沼文化の会 代表）

- ・見沼の文化、伝承を少しでも多くの人に分かってもらうために、いろいろ工夫している。子どもと接してみて紙芝居や絵話の良さを改めて認識。
- ・子どもたちの想像を補うために絵話は有効的である。地図などを用いてその空間の広さなどを実感してもらえる工夫をしている。
- ・語りは紙芝居に勝るということを教師をやっているときに実感した。子どもは話の続きを待ちきれずにいるほど。
- ・これからもいろんな方法を使い、子どもたちだけでなく大人にも訴えていきたい。

### 砂川智子氏（（有）楽園の果実 代表取締役）

- ・沖縄には、身近に神様の息吹が感じられる島々がある。
- ・来間島も年間通じて集落あげての祭事が多く、地域としての教育力・団結力というのは非常に高いものがある。しかし、観光客は本当の沖縄の姿や島々の特徴に触れ合う機会がないのが残念である。
- ・（本土から沖縄に嫁いできた）大和嫁に出来ることは、本土の都会と島々を結んでいく作業、ある意味通訳。いろんなことを伝えていく仕事が必要であると感じるようになった。
- ・離島が抱えている経済の不安定さ、つまり、農業や漁業が抱える問題に対しては、本島や本土に出て行かなくても若い人が暮らしていける状況を作っていくのが必要。
- ・本土へ行ったよい人材が帰ってきてもらえる仕組み作りが必要。

- ・島にはすばらしい食材が眠っている。おばあさんが伝承してきた料理を広げていきたい。本土の人に食べてもらい、どんどん親しみのあるものにしていきたい。知られていないマイナーな作物を作っているが、おいしさやすばらしさを伝えたい。
- ・北海道から沖縄まで気候風土が違うのに一括りにされているところがある。亜熱帯の現状をもっと広く皆さんに訴えていきたい。
- ・有機JAS、有機栽培をしているが、もっとアピールしていきたい。

#### 高橋茂子氏（千畑民話の会 会長）

- ・昔話には、なにか教えるものがあり、そこに重点をおき秋田弁にも拘り語っている。
- ・民話の会の目標のひとつは秋田県の伝承。秋田でも家庭のなかでは標準語。学校に行くと民話を語り、一つでも秋田弁を覚えてもらいたい。

#### 立石憲利氏（岡山民俗学会 理事長）

- ・民話は、昔話と伝説と世間話の3つに分類できる。農業に関する伝説でいうと非常にたくさんあるが、だんだん伝承がなくなっているのが現実。
- ・それを記録し残していくことが非常に大切な仕事。行政機関でも保存はしていない。今のうちに、祖先が残してくれた民話という文化財を記録すべき。
- ・立石おじさんの語りの学校を各地で開いており、語り部の養成も同時に行っている。
- ・伝説は良いテキストもなく、それを調査することもない。伝説は、地域や村を語ることであり、それが郷土愛の持った子どもたちに繋がっていく。子どもたちには、昔の生活や暮らしの様子を併せて語っていくことが大切。
- ・定年退職したものが自らの生涯教育をするのは良いが、それと同時に自分たちが知ったことをどれだけ次の世代に伝えていくかということが重要。

#### 和地芳江氏（下野民話の会 会員）

- ・民話の世界に入り「おだきさん」という湧水池を知った。「おだきさん」は必ずその地を訪れるてやっている。おだきさんの話を聞いた小学生は、その池を訪れたいと言う。
- ・遊水池のおだきさんはなくなる計画であったところ、この伝説のおかげで残ったというエピソードがある。
- ・今では、平成13年に高根沢町の史跡文化財に指定され、平成18年には全国疏水百選に選ばれた。町あげて湧水地清掃のボランティアを行ったり、他の町村の人達が見学に来るなどとても賑わっている。

#### 中條康朗農村振興局長

- ・今日は貴重な話を聞いて感動した。地域の言葉で地域で感じたことを伝える語りだった。
- ・農業や農村を守っていくということと、語りの世界を伝承していくことは共通するものがある。ダムやため池など土地改良施設は出来た時は地域を上げて、感動して盛り上がるが、時間が経つとそれがあること自体が当たり前になってしまい、みんなでその施設を守っていこうという感じにならなくなってしまう。作った時の感動や恩恵、ありがたみを語り継ぐことが必要。

- ・私どもも語り部の皆さんがやっているように、地域に入ってやっていかななくてはならないと、改めてその重要性を感じた。
- ・地域の資産を地域の人々に今一度、実感してもらいたい。疏水百選とか、来年度から農地・農業用水などの保全などの活動に対する支援をしようとしている。今回の交流会のことを参考にさせていただき、施策に反映していきたい。

#### 佐藤水土里ネット専務理事

- ・昔は、親から子へと、先輩から後輩へと語って伝えていくという行為が、日本の庶民の生活のなかに組み込まれていたのではないかと。しかし、今ではテレビがその役目を果たしており、特に幼少期の情操教育を考えると、提供側が一方的な価値観で情報を与えるため、若干危険性があるのではないかと感じている。
- ・語り部の語りは、音色、抑揚、間合いをうまく組み合わせながら、その時代の空間を醸し出すような技術を持っている。
- ・語りは、忙しい現代においては、人間的な心を取り戻す良い機会。
- ・全国の水土里ネットは、今後も語り部と連携をとって、地域のなかで活動していきたい。

#### 和地芳江氏（下野民話の会 会員）

- ・小学生は民話を熱心に聞いている。教育の再生に民話は欠かせない。

#### 立石憲利氏（岡山民俗学会 理事長）

- ・今農村が崩壊している現実を毎日見て、民話はその地域に住んでいる人達の共通のもの。農村など崩壊している現実の中、民話をもう一度見直し地域づくりや農村の立て直しに役立ててはどうか。そのための材料を早急に集め、また皆さんのところに届けたい。
- ・語り部交流会は、全国の語り部の活躍を知ることが出来るので、元気をもらえるので、年に一回このような会があればありがたい。

#### 高橋茂子氏（千畑民話の会 会長）

- ・時間が経つと、農家の人も田沢湖や田沢疏水のありがたさを忘れていくのではないかと。観光だけでなく田沢疏水のありがたさを再認識しながら、語りあっていきたい。

#### 宮田正治氏（見沼文化の会 代表）

- ・感動を受けた語りは、何年も覚えているもの。語り部が語るだけでなく、多くの人を知ってもらうことが重要。そのためには形のある本、絵話、紙芝居にして残し普及したい。

#### 砂川智子氏（（有）楽園の果実 代表取締役）

- ・地域の伝承は、地域とその生まれついた人との絆を深めていく作業。
- ・農業をやって気付くことは、先祖代々の土地を守っていくという側面が強いなかで、自分の生まれた地域にいかにか愛着をもって、それを誇りとして生きていくかということ。それが、その土地を守っていくキーポイント。
- ・他地域からきた人は、子どもたちにその地域のすばらしさを伝える鍵を握っている。そ

れが農業の振興にも繋がっていく。

**安実隆直氏（水土里ネット七ヶ用水 総務課長）**

- ・今日を機に地元の民話や伝説にチャレンジしてみたいと思った。
- ・観光だけでなく、語りを通じてその風景に触れることで、都市と農村の交流が生まれな  
いか。

**中條康朗農村振興局長**

- ・表現の仕方や形は違うが、どれも素晴らしかった。
- ・日本は1000年以上農山漁村の歴史が続き、基本的な潜在意識は農村である。都市はその特殊の機能をもったもので、基本は農村である。
- ・方言が響いてきた。自然に入ってきてその地域と一体となっている。語り部の皆さんが地域に愛情、誇りを持っている。そういうところが感動する一つのベースになっている。
- ・今回は、最近の話題も語りとして話してもらった。その地域のみinnで出来たことを新しい語りの原点として、愛着や誇りで受け止めて後世に残すこと、これが今日のいくつ  
かのなかの成果であると感じた。
- ・農業を巡る状況は厳しいが、農村に住む喜び、誇りを出来るだけ多くの人に伝えたい。  
今日から会場の皆さんも語り部になって、周りの方に日本の原点は農山漁村であることを語ってほしい。語りを日本の文化として残すべき。このような会を通じて地域の思い  
が全国共通のものとなるよう、支援していきたい。